

激動の経営

一瞬で暗雲

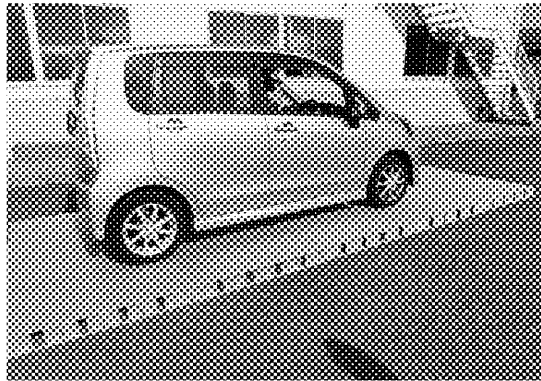
パック・ミズタニ（大阪市西区）の前身は、1909年に大阪の立売堀で創業した木箱業だ。戦後、水谷製函木工所として事業を再開した。創業の年は、

パック・ミズタニ ②

段ボール大手のレンゴ―とくしくも同じ。かつての立売堀周辺は「ネジやクギ、機械や軍需関係の企業が集積し、重量物の運搬に木箱が必要だったようだ」と社長の水谷博和は話す。

59年には段ボールを事業の柱とする水谷紙器を新設。兵庫県伊丹市に工場を開設したり三井物産と提携したりと事業を拡大した。66年に水谷紙器と水谷製函木工所が合併し、90年に現社名のパック・ミズタニへと至る。こ

沈着果断 祖父の姿に学ぶ



の間、中興の祖として辣腕を振るったのが、博和の祖父博だった。順風満帆の道のりに見える。ところが92年に災禍が訪れた。通行人によるたばこの不始末が原因で、伊丹工場

が全焼してしまった。「ただ事じゃないことが起きた」。小学生だった博和にも事態の深刻さは分かった。ジタバタしない

に必要「印刷」「木型」や図面などの一部は残っていた。仕入れ先と協力し、火事

火災からの再建後、乗用車が乗った段ボールの生産体制を維持する

工場全焼も「攻め」の行動

の翌日も来る注文をさばきつつ、当時は会長だった祖父、専務だった父の博行が力を合わせた。祖父は経営判断に迷いがなかった」と博和は当時を振り返る。火事の翌年、数億円を投じて大型の印刷機を導入。取引が増えつつあった自動車部品を運ぶため、大きく強靱な段ボールを生産できる体制を整えた。次の方向性を示して従業員

言っべきか。燃え続ける工場を前に、図面を取りに戻ろうとする父を制止し、祖父は「ジタバタするな」と言い放ったという。「こうなったら燃えるしかない。燃やしとけ」。緊急時も冷静さを失わず、次に何をすべきかを考え抜くその姿は、幼かった博和の心に強烈な印象を残した。

での段ボール生産に乗り出したり、物流業に参入したりと次々と新たな試みに挑戦してきたのがその一例だ。いまでは兵庫県西宮市を中心に複数の物流センターを運営する。段ボールなどの製造販売だけでなく、それらを使った商品の保管や管理まで請け負い、包装資材のコスト削減やオペレーションの効率化を訴求する。物流を取り巻く環境は厳しいが、博和は商機を確信している。包材製造にとどまらず「ハコブ」を変え「ハコブ」を変え「ことを狙う。」

(敬称略)